

子安」や「隔漢江寄子安」の詩などに述べられるのは、ひたむきな愛の思いである。一方、「酬李學士寄簾」での「雲扇と情相似て」、「情書寄李子安」での「桐葉…鳴り、銀燈…暗し」、あるいは「寄子安」の「雲は定まらず」、「送別」の「水柔かにして器に逐い定め難きを知る」、「江陵愁望寄子安」の「君を憶へば、心は西江の水の日夜東流して歇む時なきに似たり」などの詩句に象徴されるのは、愛の衰えに対する不安や恐れあるいは未練の情である。新婚というのに玄機は李億への愛の表現は前述の九篇の作品から言えば、喜びや楽しさの情よりも不安などマイナスのイメージの感情吐露に傾く。その要因として、彼女は金銭で身請けされた娼妓という卑賤の身分であるので、良民の夫婦のような愛の交流は望むべくもなく、常に愛の破綻が予感されるものである。そのため、新婚の喜びを詠う作もあつたであろうが、やはり、不安などの表白が中心とならざるをえなかったと言えよう。とはいえ、破綻が予感される愛であればあるほど、精神的な絆に結ばれた家庭的な愛—玄機の理想とする愛—を追求する思いはより強いものとなろう。それ故、玄機はむしろ憂愁に満ちた愛の不安や未練を李億に訴えることによって、その愛を繋ぎとめ、一途に彼を愛そうとした。これこそ彼女が求める愛の理想の在り方であつたと言える。

魚玄機にとって李億は最初に身請けしてくれた男性である。そして、彼女も年令はまだ二十歳前後と若かつた。それ故、自ら理想とする愛を李億に求めた。現実には埋没することなく、己れの理想を絶えず希求してやまぬ心は、常に満たされぬ思い、愛の渇きだけを後に残す。理想を求めない者には飢餓も絶望もなければ、また孤独も苦悩もない。李億に対する理想的愛の希求が激しいほど玄機の憂愁の情は深まってゆく。玄機はこの憂愁の情を通して、李億への激しくそして一途な愛を表白したのである。

注(1) 『詩語の諸相—唐詩ノート』松浦友久(研文出版) 113頁

注(2) 『玉台新詠』(巻七)「詠秋夜」(湘東王繹)に「秋夜九重空、蕩子怨房櫳……金徽調玉軫、茲夜撫離鴻」とあり、「離鴻」は曲名。

注(3) 『魚玄機・薛濤』(漢詩体系十五)辛島 驍(集英社) 151頁

注(4) 右に同じ 154頁

注(5) 右に同じ 156頁

注(6) 右に同じ 159頁

(一九九九年十月一日受理)

従い、自分の人生を自分できめることができなかったし、あなたの愛もまた同様に自由気ままなものであった。また、「雲は無心に岫（峰）を出づ」と言うように、あなたは情が薄く、もう二度と私の許には帰って来ないだろう。今、私は春風の吹く夕暮れの川岸で怨み悲しい思いに沈んでいる。ふと見れば群れを失ってしまったのか、おしどりが一羽淋しく飛んでいく。それはまさしく私の姿であると述べる。自由気ままな「雲」に李億の薄情さをたとえ、その薄情さにふりまわされる自分の気持を方円の器に随う水で暗示する。さらに、後半の二句はひたすら情を尽した結果が群れを失った一羽のおしどりに同じだと激しい孤独の思いに苦しむ玄機の心情が述べられる。純粹で一途な愛であればあるほど、その破局の憂愁と怨恨の情は深い。

次の詩は、その作詩の時期について不明であるが、捨てられたあとの李億への恋情を詠う作品である。

閨 怨

藤蕪盈手泣斜暉	藤蕪手に盈つるも斜暉に泣く
聞道鄰家夫婿歸	聞道鄰家夫婿歸ると
別日南鴻纔北去	別れし日には南鴻纔めて北に去り
今朝北雁又南飛	今朝北雁又南に飛ぶ
春來秋去相思在	春來り秋去るも相思は在り
秋去春來信息稀	秋去り春來るも信息は稀なり
肩閉朱門人不到	肩閉じ朱門には人到らざるに
砧聲何事透羅幃	砧聲何事ぞ羅幃を透す

藤蕪（香草）を手一杯摘んではみたものの、あなたのことが忍

ばれて、夕日をあびながら泣いている。人の話によると鄰の家では旅から夫が帰って来たとか、私が夫と別れたのは雁が北に帰る春の時節、それから半年。今朝またその雁がもどって来たのを見た。春から秋へと時の流れの中で常にあなたの事を思いつづけてきた。しかし、秋が過ぎ春がやってきたが、あなたのたよりはありそうにない。門の扉をしめたままの家には訪れる人もいない。遠近の家々から夫の冬着のために夜なべしてたく妻のきぬたの音が私の寢床のまわりのとばりのなかまで響いてくると述べる。最初の二句は漢代の古詩に、追い出された妻が山で香草を摘んで帰る途中で出会った元の夫から後妻と自分との長所短所の比較を聞く作品があるのを引いて、詩中の妻はまだもとの夫に会う機会があったが、自分はそうした機会すらすでないし、鄰家では旅先から夫が戻って一家の団欒があるのに自分にはない、なんとみじめな女であろうかと嘆いている。また、「鴻雁」にこと寄せて、別離後すでに一年の月日が経過したにもかかわらず、恋の思いは忘れ難いことを述べる。最後の両句は、望みなき李億の帰りを浮気もせずに独り閨でひたすら待ちつづける玄機の思慕と寂寞の情が述べられている。また、「閨怨」という詩題には、情人の愛を完全に喪失したことを自覚しながらも、未練絶ちがたい心情を抑えきれない女性のひたむきな愛の切なさがかめられている。

結 語

以上、魚玄機の李億に対する情を述べた九篇の詩について見てきた。玄機が李億との結婚生活の中で表白した愛は一途な恋慕の情であった。しかし、一途であればあるほどその裏には愛の衰えに対する不安、恐れあるいは未練の情が内在していた。例えば、「春情寄

旅人を運ぶ舟のつながれているのが眺められる。あなたもそれらの舟に乗って行かれることであろう。一度別れてしまえば定めなき雲のように散りじりになるのは必定、愛もまた然り、悲しいことである。誠実な愛というものは、河の流れのように永遠に変わることがないものである。どうかあなたもそうした永遠の誠実な愛があることを学んでほしいものだ。この世の何処かにそうした愛はあるはず。

とはいえ今となつてはその願いも虚しいもの、花咲く春の季節にも似た愛ある私の春はもう二度と巡つてこないことを知った。それ故、この楼上で酒を飲んでも、淋しさ、悲しさ、怨めしさのために心静かに酔える私ではないのであると述べる。第一句と二句には「千厄」、「百結」と玄機の苦悩に満ちた惜別の情が吐露される。

三句目の「蕙蘭銷歇婦春圃」は、愛情衰えて捨てられ、やむなく元の花街に戻ることを暗示するものであろうが、この比喩的表現に示される玄機の愛の結末は、前述の「酬李学士寄簾」の詩に「扇のように、秋になれば不用の物として衣装箱に収められ、忘れられてしまふのではないか」という、いわば愛の衰えに対する不安と呼応して、内心恐れていたことが今や現実となつてしまったことを述べたもので、彼女が初めて李億の愛を受け入れた時から漠然と抱いていた予感的中したとも言える。また、人の世の愛は聚散して定まることがない雲のように無常ではかないものだと言きながら、しかし、だから人の愛情というものは歇きることのない河の流れのように永遠であつて欲しいと誠実な愛の理想を語るのである。

次の詩は、詩題に李億（字は子安）の名は明示されていないが、武漢の地で思いもかけず李億に捨てられ、呆然としながら彼を見送つたときの作であるという。

送別

送別

秦樓幾夜愜心期	秦樓幾夜か愜心を期せしも
不料仙郎有別離	料らざりき仙郎別離有らんとは
睡覺莫言雲去處	睡覺言ふこと莫し雲去りし處
殘燈一釭野蛾飛	殘燈一釭野蛾飛ぶ

高どので幾夜かの堅いちぎりを結ぼうと思つていたのに、その願いも無視して私を捨てられるとは思ひもかけないことである。かの慈しみあつた日々も夢から覚めた如くすでに追憶の中、今さらあなたの行方を尋ねても詮なきこと。目の前には燭台の火に引きつけられた野蛾が狂つたように飛びまわっていると述べる。信んじて求めつづけた愛の幸せが無残にくずれ、切なく狂わんばかりの思いに沈む様が詠われている。「野蛾」はいずれ炎に焼かれる運命であり、それは愛する男への未練を強いて絶ち切ろうとしても一途であつたが故に絶ち切れない玄機の身をもこがす情念の象徴であろう。

次の詩も前述の「送別」と同様に、武漢の地で詠んだものといわれ、憂愁の思いを吐露したものである。

送別

送別

水柔逐器知難定	水柔らかにして器に逐 ^{したが} い定め難きを知る
雲出無心肯再歸	雲出づるに心無く肯えて再び歸らんや
惆悵春風楚江暮	惆悵 ^{もろもろ} す春風楚江の暮
鴛鴦一隻失羣飛	鴛鴦一隻羣を失つて飛ぶ

「水は方円の器に従ふ」と言うように、私はあなたの心のままに

飛んでいる。時が流れて、夕もやがたちこめたあたり、宴席で歌姫のうたう歌声がもの悲しくかすかに聞こえてくる。渡し場のまわりでは、月光がひっそりと照り輝き、夜は静かに更けてゆく。淋しい限りである。あなたへのつのる恋心からすれば、目と鼻の先のほんの短い距離でも千里を隔てた思いがするの、ましてや、あちこちの家で打つ砧の音が遠くから伝わってくるのを聞くと耐えがたい寂寥感におそわれると述べる。「鴛鴦」や「鵲橋」は連れ合いや仲間のある幸福の象徴であり、玄機にとっては憧れの愛の姿である。自分もこの鳥の類と同様、いつもあなたと一緒にいたいという思いを述べる。片時も相思の人と離れがたくはないという激しい恋心が吐露されるが、五・六句の情景描写は激しい恋慕の裏側にある満たされない孤独感を示すものである。舟旅の途中で独り舟中で情人の帰りを待つ時の愁いは、そのまま愛の一途さによって引き起こされるものといえよう。

次の詩は、旅先で李億に捨てられ、武漢から一人で都の長安に帰る途中、江陵で未練の恋情を述べた作である。

江陵愁望寄子安 江陵の愁望子安に寄す

楓葉千枝復萬枝 楓葉千枝復た萬枝
江橋掩映暮帆遲 江橋掩映し暮帆遅し
憶君心似西江水 君を憶へば心は西江の水の
日夜東流無歇時 日夜東流して歇む時なきに似たり

紅葉した楓の葉が幾重にも重なり、河辺を華やかに彩っている。彼方に架かっている橋が河面を覆うように影を落としている夕景色の中を、帆掛け船がまるで静止しているかのようにゆっくりと進ん

で来る。あなたを思う私の心はちょうどあの西側の河水が昼夜となく東流して止まる時が無いのに似ていると述べる。千枝万枝と重なりあった楓の葉の華やかさは、過去の李億との愛の生活の幸せを象徴するものであり、夕暮れどき舟着場にゆっくりともどって来る舟は、万に一つも可能性のない李億の乗船の可能性を、たとえゆっくりであっても望みたいという思いを暗示するものであろう。さらに、東流してやまぬ西江の水は、連綿と続く忘れられない恋慕の情と、その恋慕の情が李億のいるであろう東の方へ止まることなく伝わっていく様を示すものである。情人を忘れられない己れの氣持を愁う玄機の切なく一途な追慕の情が吐露されている。

次の歌も旅先の武漢で愛を失ったときの作である。

寄子安 子安に寄す

醉別千厄不浣愁 醉別千厄なるも愁いを浣がず
離腸百結解無由 離腸百結して解くに由無し
蕙蘭銷歇歸春圃 蕙蘭銷歇して春圃に歸り
楊柳東西絆客舟 楊柳東西に客舟を絆ぐ
聚散已悲雲不定 聚散已に悲しむ雲定まらざるを
恩情須學水長流 恩情須らく學ぶべし水の長へに流るるを
有花時節知難遇 花有るの時節遇ひ難きを知る
未肯厭厭醉玉樓 未だ肯えて厭厭として玉樓に醉はず

いくら酒杯を重ねてみても、今宵の別離の愁いを晴らすことはできない。胸底より湧き出る悲しみにはらわたもむすばれて解くすべもない。芳しき香草も香や色を失しなれば春の烟に帰される。今の私の身の上と同じ。楼上から楊柳の木々が立ち並ぶ河岸に東や西に

水を飲んでも薬を食^{きだ}べても、あなたを思う激しい心の火は消すこともできない。あなたが滞在しているのであろう晋水や壺関のあたりが毎夜夢の中に現われる。鏡の裏に彫^うつてある鵲にこの私の思いを託^{たく}そうと願^{ねが}うけれど、あなたへの道のりは遠く、決して適えられないことはないと思え、また、琴をかき鳴らしてこの淋しさを慰めようとしても、その調べは哀しい「飛鴻」の曲となつてしまい、飛んで行けないわが身の心の苛立ちを少しも抑えることができない。まさにいまの私の心の不安を物語るかのように、井戸のそばの梧桐の葉が秋の雨に悲しい音を響かせている。窓辺近くの燈火は明け方の冷たい風に、今にも消え入りそうな絶えだえなる光を暗くなげかけている。あなたからの便りをひたすら待つている私であるが、便りはいかにやつてこない。どうして便りを下さらないのか、その理由を一体どこに問えばよいのか、その手立てもない。故事に鯉の腹から手紙が出てきたとあるが、ひよっとしたらあなたの手紙も魚の腹から見つかるかも知れないと思ひ、終日河辺で釣糸をたらしめているが、目に映るものは空しく流れる河の水だけであると述べる。李億への激しい恋情は水や熱をさげるきはだでも抑えがたい。玄機の情の激しさとひたむきさがそのまま直接吐露される。しかし、その一途な思ひも「墮鵲を愁ひ」、「飛鴻を怨む」、「秋雨に鳴り」、「曉風に暗し」、「書信茫茫」、「碧江空し」という詩句に象徴されるように、玄機の意識下にある愛の実体は常に不安、寂寞、憂愁、悲哀といった感情にゆれ動いている。玄機にとつての愛の未来は不幸をもたらすもの、満たされないものでしかないかのである。その要因としては、娼家の出身であるということ、男の単なる玩具とならざるをえず、一般の夫婦のような真の愛情を得ることは非常に困難であつたことが挙げられよう。つまり、常に別れを予感させられる愛であるからである。それ故、その一瞬一瞬を大切に、相

手にする思いで愛の表白をせざるを得なかつたのである。すなわち玄機は新婚の喜びやたのしさを率直に述べることはできなかったと言える。この点について、玄機には自分の少女時代を回想する詩がない。五十篇ほどの詩が現存しているので、一言なりとも言及していてもよさそうであるが、それまでの過去というものが全く存在しなかつたかのように過去を語らない点に、彼女が宿命的な運り合わせの悪さをはつきりと自覺していたことを暗示している。だから彼女にとつては愛の喜びもまた不幸に通ずるものという認識のなかで、李億への愛を吐露しているところに特色がある。

次の詩は、李億と湖南に旅をした時に思いを寄せた詩である。

隔漢江寄子安 漢江を隔てて子安に寄す

江南江北愁望	江南江北愁望
相思相憶空吟	相思相憶空吟
鴛鴦暖臥沙浦	鴛鴦は暖かなる沙浦に臥し
鸂鶒閑飛橘林	鸂鶒は閑やかに橘林に飛ぶ
煙裏歌聲隱隱	煙裏歌聲は隱隱たり
渡頭月色沈沈	渡頭月色は沈沈たり
含情咫尺千里	情を含んでは咫尺も千里
沉聽家家遠砧	沉んや家家の遠砧を聽くをや

漢水に隔てられた向こう岸の町に出かけたまま、帰って来ないあなた。私はひとり舟に残されたまま、悲しい思いであなただけのいらつしやる町の方を眺めている。暮る恋しさを詩に託してみても空しいばかり。周囲を眺めると、つがいのおしどりが暖かな日射しのなかの砂浜で、仲睦まじく憩い、水鳥たちは橘の林の上をゆつたりと

不愁行苦苦相思 行くことの苦しきを愁へず相思に苦しむ
冰銷遠磳憐清韻 冰銷えて遠磳清韻を憐み
雲遠寒峯想玉姿 雲遠くして寒峯玉姿を想ふ
莫聽凡歌春病酒 凡歌を聴いて春酒に病むこと莫れ
休招間客夜貪棋 間客を招いて夜棋を貪ること休れ
如松匪石盟長在 如松匪石盟長へに在り
比翼連襟會肯遲 比翼連襟會ふこと肯へて遅からんや
雖恨獨行冬盡日 冬盡きるの日に獨り行くを恨むと雖も
終期相見月圓時 終には月の圓なる時に相見んことを期す
別君何物堪持贈 君に別れて何者か持贈するに堪えん
淚落清光一首詩 淚は落つ清光一首の詩

山路は険しくそばだち、登る石段の道も危険に満ちている。しかし、あなたを思いつつ、別れて帰るこの身の苦しさに比較すれば、この険しさもさほど苦しいとは思われない。冬の氷が溶け始めた遠い谷川から、冷たいせせらぎの音が聞えてくる。その透き通るような清流の響きは、あなたの美しい声を思わせ、また、頂きに雪を残してはるかにそびえる寒峰の姿に、あなたの姿を見る思いがする。春の夜、つまらぬ歌を聞いて酒に病むことがないように。また、用もないのに客を招いて夜ふかしの碁にふけつたりしないように留意して欲しい。操高い松や不易の石のように二人の変らぬ愛の契りは永遠のもの。比翼連理の言葉通り固く契った者同志、いつまでも逢えぬということはあるまいと思う。明日は立春、あなたと別れて独り旅するのを残念に思っているが、満月になる頃にはきっと必ず会えることと思う。あなたと別れている今、私の思いを託すべき贈物として何もないが、きらりと光る涙が一篇の詩となったので、この詩を贈ると述べる。旅程の苦しさよりも別れの苦しさの方が深く心を

傷つけるもの。冬の氷が解けて流れる谷川のせせらぎに相手の声を聞き、白雪の残る寒峯の姿に相手の姿を重ねてみたり、さらに、相手の身体の安寧を祈りながら、二人の間には固い契りがあるという詩句の中に、ひたすら李憶の情愛を繋ぎ止めて置きたいと思う玄機の恋慕の一閃な切なさがある。第九句に「獨り行くを恨むと雖も、終には……相見んことを期す」とあるが、「恨」の字を用いることによって、二度と再び一緒に旅することはないだろうという予感に悲しんでいる。とはいえ、それではあまりにも苦しすぎる、再会の日は必ずあると自らに言いきかせて、不吉な予感を消そうとする心情が読みとれる。そして、李憶への思いを託せるものはただ涙で綴られた一篇の詩のみであると述べる最後の二句にこめられたものは、玄機の李憶に対する愛の純粋な思いである。

次の詩は、山西の旅から先に一人で長安に帰って来た玄機が、まだ帰って来ない李憶を待ちわびている時の作で、激しい恋情が述べられる。

情書寄李子安

情書李子安に寄す

飲冰食藥志無功	冰を飲むも藥を食ふも志功なし
晉水壺關在夢中	晉水壺關夢中に在り
秦鏡欲分愁墮鵲	秦鏡分たんと欲するも墮鵲を愁ひ
舜琴將弄怨飛鴻	舜琴弄せんと將るも飛鴻を怨む
井邊桐葉鳴秋雨	井邊の桐葉は秋雨に鳴り
窗下銀燈暗曉風	窗下の銀燈は曉風に暗し
書信茫茫何處問	書信茫茫何れの處にか問わん
持竿盡日碧江空	竿を持つこと盡日なるも碧江空し

魚玄機の李億に寄せる情詩

矢嶋 徹 輔

一

魚玄機は愛を詠った娼家出身の女流詩人である。『全唐詩』によると四十九首と断簡五聯が現存している。この現存の詩中、三十編ほどが異性への愛情詩である。玄機は二十歳前後の頃李億（字は子安）という官吏に身請けされて妾となった。しかし、妾とはいえ愛情ある結婚生活に未来の夢を託そうとしたが、結局社会的に蔑まれる階層出身であり、正妻との確執もあったかも知れないが、李億の心変わりにより、不幸な結末を迎えることになる。愛の生活に破れた玄機は出家して女道士となり、ひたむきな愛を忘れたかのように自由な愛情を追求し、異性に対する恋情をひたすら吐露した。

この小論は、つかの間の愛を得た李億との愛の思いを真摯に詠んだ詩が九篇（詩題から明らかなもの六篇その他三篇）現存しているので、その詩を通して、玄機の李億に対する愛情について述べるものである。

二

次の詩は、玄機が李億となじみになった頃、彼から夏用の敷ござを贈られた時の謝礼の作である。

酬李學士寄簾

李學士の簾を寄せらるるに酬ゆ

珍簾新鋪翡翠樓

珍簾新に鋪く翡翠の樓

泓澄玉水記方流

泓澄たる玉水方流を記す

魚玄機の李億に寄せる情詩（矢嶋）

唯應雲扇情相似
同向銀牀恨早秋

ただまさに雲扇と情相似て
同じく銀牀に向つて早秋を恨むべし

あなたから戴いた珍らしい夏用の敷ござを始めて私のベッドに敷くと、竹の節の模様がちょうど清らかな水の流れのようで、とても涼しうである。あなたの寄せて下さる愛情がしみじみと感じられて、大変嬉しいのであるが、この敷ござも夏場だけのもの、秋の季節が来たら無用の品として物入れに収められてしまふ扇のように、秋には打ち捨てられ、敷ござも私と同じく一人寝の淋しさを怨むことであろうと述べる。李億の愛情を確認しつつも恋の初めに、すでに愛情の衰へに対する不安や恐れ、あるいは愛情の破綻への予感めいた心情が述べられる。心ときめく愛の始まりにおいて早くもその裏面に内在する心の動揺はそのまま玄機の悲運を物語るものと言えなくもない。李億は詩人として名を残す人物ではなく、玄機の詩才よりも、その美貌と若さに魅かれたのである。さらに妓樓の女であるということは当時の風潮から言っても、平等の愛は成立しがたいものである。だから、玄機の李億に対する愛は常に破綻が前提となるものであり、その結果、ひたすら懇願にも似た愛の求めによってしか満たされないものであることを玄機もひそかに理解していたであろう。それ故、一度失しなえばもう二度と手に入らないという思いが「恨」の字に示されている。

次の詩は、李億の郷里である山西への旅の途中で一時的に別れなければならぬ事があり、その別れの途上で贈ったものという。

春情寄子安

春情子安に寄す

山路敲斜石磴危

山路敲斜石磴危し